30th Anniversary Concert

創立30周年記念特別演奏会

水星交響楽団

指揮：齊藤　栄一

伊福部　昭
オーケストラとマリンバのための
「ラウダ・コンチェルタータ」
マリンバ独奏：山本　勲

グスタフ・マーラー
交響曲第9番　ニ長調

2014.08.16（土）13:00開場　13:30開演
たましんRISURUホール（立川市市民会館）

ご挨拶

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。おかげさまで、水響は今年創立30周年を迎え、5月には、50回目の定期演奏会をすみだトリフォニーホールで開催し（マーラー交響曲第2番「復活」など）、たくさんの方々にご来場いただきました。改めて御礼申し上げます。

さて、今回の演奏会は創立30周年を記念して特別なプログラムを用意させていただきました。先日の「復活」をはじめとして、マーラーは、水響にとって最も重要な作曲家の一人ですが、その中でも間違いなく最高傑作であると同時に、交響曲という形態の極北ともいえる交響曲第9番です。

第9番は、その内容ゆえに演奏自体も至難であり、一般的には、演奏回数も多くはないのですが、水響の本拠地である東京都国立市では、1980年代の半ばから現在に至るまで、一橋大学兼松講堂を中心にマーラーの第9番が演奏され続けております（今では国立市の年末の風物詩とまで言われており、一橋大学管弦楽団の団員は卒業までに4回はこの曲の本番を経験し社会人となっていきます）。実をいいますと、水響設立のきっかけのひとつは、この「第9」演奏会であり、その意味で、この曲ほど、水響30周年を記念するプログラムに相応しいものはなく、団員の総意として取り上げることになったわけなのです。

プログラムのもう一つは、今年生誕100周年を迎えた作曲家伊福部昭の名曲、オーケストラとマリンバのための「ラウダ・コンチェルタータ」です。形態としてはマリンバ協奏曲ですが、実質的にはマリンバとオーケストラは全く対等な存在であり、シャーマンと民衆の如く、祈りと激しい踊りが相互に繰り返される「伊福部ワールド」全開の独創的な名曲です。なお、ソロマリンバはアマチュア打楽器界で「打王」として敬われている水響団員の山本勲が担当致します。

一見対照的な2曲が並んではおりますが、個人的には、この2曲に通底するものは驚くほど似通っているように感じられてならないのですが皆さまはいかがでしょうか。

それでは、ごゆっくりとお聴きください。

水星交響楽団　運営委員長　植松 隆治

水星交響楽団

水星交響楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成されたアマチュア・オーケストラである。都内の主要ホール等で、定期演奏会を年2回行い、マーラー、バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲に積極的に取り組んでいる。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。

本日のプログラム

伊福部 昭
オーケストラとマリンバのための「ラウダ・コンチェルタータ」（約 25 分）

— 休憩（15 分）—

グスタフ・マーラー
交響曲第 9 番ニ長調（約 85 分）

指揮
齊藤　栄一

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981 年には京都大学交響楽団と 2 週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82 年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第 9 回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。

84 年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」（95 年、東京文化会館）、「ダフニスとクロエ」（99 年、新宿文化センター）を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005 年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3 部作（4 台のピアノと打楽器）を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に「往還する視線　14 － 17 世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」（近代文芸社）、「振っても書いてもしょせん酔狂」（水響興満新報社）がある。

マリンバ
山本　勲

1965 年千葉県生まれ。「宇宙戦艦ヤマト」「スターウォーズ」「2001 年宇宙の旅」「富田勲の惑星」「CBS クラシック 100 の LP」「市川交響楽団のベト 7」「美術の教科書に載っていた笛を吹く少年」などに影響を受けフルートを始める。中学校の吹奏楽部では Top 奏者として君臨するが、カウディル「バンドのための民話」ジョン・ウイリアムズ「スターウォーズ」の強い影響により高校入学とともに打楽器に転向、ネリヴェル「交響的断章」木下牧子「序奏とアレグロ」アルフレッド・リード「交響曲第 2 番」ギリス「キッチンシンクバリエーション」ニクソン「太平洋の祝典」フーサ「アルフレスコ」「プラハのための音楽 1968」などの名曲に親しみその道にはまる。

大学では応用物理学を専攻しつつ、オーケストラに入団。ロマン派打楽器パートの驚くほどのひまさ加減に JPC サマーキャンプ、ミューズ音楽院のヴァイブラフォンコース、早稲田大学モダンジャズ研究会、バークリー・イン・ジャパンに参加。有賀誠氏、松石一宏氏、浜田均氏、ゲイリーバートン氏のレッスンに参加。市川「HS.Art」金町「38」荻窪「Goodman」などでの自己バンド活動や、Latin Jazz band「Los Vivalatinos」でのジャズヴァイブラフォン活動を展開する。

一方オーケストラでは、一橋大学管弦楽団にて現代音楽マニアの打楽器集団に出会い「I.G. of Percussion Orchestra」に参加。池野成「Evocation」田中利光「マリンバの為の組曲」三木稔「マリンバスピリチュアル」などを演奏。この頃よりたがが外れ、【やりたいと念ずれば、やれる】と確信する。

現在は半導体の復活に力を注ぐ傍ら、水星交響楽団、ル・スコアール管弦楽団、アイノラ交響楽団、オーケストラ・ダヴァーイなどのオーケストラを中心に活動している。日本フィル打楽器奏者の三橋敦氏に師事。2011 年安倍圭子国際マリンバアカデミーに参加し、世界的マリンバ奏者である安倍圭子氏のレッスンを受講。2011 年 8 月、すみだトリフォニーホールにて伊福部昭「オーケストラとマリンバのための『ラウダ・コンチェルタータ』」を森口真司指揮オーケストラ・ダヴァーイと共演。これを機に 2012 年より Yang Yamamoto としての活動を開始した。

曲目紹介 1

オーケストラとマリンバのための「ラウダ・コンチェルタータ」

伊福部 昭　*Ifukube Akira*

今年はほんとに記念が重なった大きな年ですね。言わずと知れた伊福部昭先生の生誕 100 周年、水星交響楽団創立 30 周年、そしてわれらがマエストロ齋藤栄一さん生誕 60 周年！このような記念の年に齋藤さん、水星交響楽団のみなさまと伊福部先生の「ラウダ・コンチェルタータ」をご一緒できることは身の程知らずな冒険とはいえ望外の喜びです。

ひょんなことから一橋大学管弦楽団のみなさんと縁ができ、「やりたいと念ずればやれる」という確信を得てから、もう 30 年近く経ったということですよねー。その辺りもぜひ書いてしまいたいところですが、あまりに曲と関係がありませんので後の方にそっと足しておきます。

さて、誰もが知っているこの名曲「オーケストラとマリンバの為のラウダ･コンチェルタータ」はチェレプニン賞に輝いた日本音楽の星！伊福部先生が書かれた金字塔ですね！

曲は途切れのない単一楽章。「神話的に」と書かれた弦楽器の息のながーい憂愁のメロディーで衝撃的に始まります。天空から降り注ぐようなホルン、息を潜めるようなオーボエ、そして原初の思いをぶつけるかのようなマリンバの無骨なモノローグ。これはやがて現れるめくるめくマリンバの主題提示でもあるのでした。再びそれに答えるかのような弦楽器の憂愁のメロディーがつぶやくように静まっていくと…　地の底から響いてくるようなマリンバの低音の刻み、なんと伴奏はティンパニだけ！延々と続くマリンバの刻みに呼応するようにオーケストラが目を覚ましていく！マリンバが見得を切るようなスフォルツアンドでけりをつけると、待っていたかのように弦楽器の壮絶な刻みがあとを紡ぎます。ひとしきりオーケストラが活躍した後は伊福部先生の真骨頂！なんとソリストにひたすら行進曲風刻みを伴奏させてオーケストラが息のながーいながーい憂愁のメロディーを繰り広げます！憂愁のメロディーとひたすら突き進むバーバリズム！もはやここまでか！とまで繰り返された末に感極まったフルオーケストラの 2 回の叫び！ハープに縁取られたマリンバのモノローグ、なにかを思い切るような弦楽器のメロディー、レッジェーロと書かれたゆっくりとしたマリンバの伴奏にオーケストラの雅楽の響き。そして長い長いマリンバのカデンツア…

やがて雪の中をひとり歩くようなゆっくりとしたマリンバの伴奏によりそう孤高のフルートソロ。ついにオーケストラが息を吹き返します。冒頭の弦楽器の憂愁のメロディーが回帰し、冒頭でオーボエが奏でた孤高のテーマをマリンバが大トレモロで再現します。拍子木のようなティンパニのソロが寄せては返す波のように静まると、ついに終末進行へののろしがあがります。トムトムの合図とともにノンストップアクション！地の底から響いてくるようなマリンバの低音の刻み､呼応するオーケストラの響き！ソリストに伴奏させるオーケストラの息のながーいながーい憂愁のメロディー！！

ここで調性も変わりマレットも変えて大コーダ！マリンバ、高音弦楽器、高音木管楽器がひたすら刻む中、低弦と金管が冒頭の憂愁のメロディーを大々

伊福部先生生誕 100 周年の年
伊福部昭作曲「アイヌの叙事詩による会話体牧歌」

的に拡張して再現します！！
　これぞ日本音楽の力、繰り返しによるナチュラルトリップ！
　なだれ込むように一気に終結です。指がちぎれそうです。

　というのがわたくしの「ラウダ観」なのでございますが…　さすがに伊福部先生のことをもっと知りたい！ということで、ここ 2、30 年の再評価で劇的に増えた伊福部先生本を調査いたしました。伊福部昭先生はさすが芸大や東京音大で教鞭をとられていただけあっていいお話しがたくさん載っていました。いくつかご紹介いたします。

　まずは「ラウダ誕生」編です。木部与巴仁さんの名著「伊福部昭の音楽史」からの引用でございます。年号はアラビア数字に統一いたしました。

東京音楽大学の学長に就任した 1976 年、「リトミカ・オスティナータ」以来、15 年ぶりの大曲に臨むことになる。
ある日。木琴奏者の平岡養一が伊福部のもとを訪れた。アメリカ全土にその名を知られ、日米を往復しながら演奏活動を続けていた第一人者である。～中略～木琴とオーケストラが対等な難易度を持つ曲。あるいは、木琴とオーケストラが同等に動く曲。そういうものが欲しいという。(筆者注：以下はきっと伊福部先生のお言葉です。)
「それは私も望むところでした。普通、コンチェルトというと、独奏楽器に比べて、オーケストラが演奏する部分は非常にやさしいです。～中略～しかし、私は両方交互に動くように心がけております。そうするとコンチェルタンテ、" 協奏曲風" ということになるんですね。「協奏曲風交響曲」に始まって、「リトミカ・オスティナータ」とか「ラウダ・コンチェルタータ」とか。協奏曲といってないのはそういうことです。～中略～木琴とオーケストラのための「ラウダ・コンチェルタータ」が完成したのは、1976 年 7 月 19 日です。ところが残念なことに演奏されなかった。平岡さんの流儀と合わないところがあったようですね。
それから一年ほど経ったころです。東京音大の学長室に、新星日本交響楽団の運営委員長をしておられた池田鐵さんが初めて見えたんです。私の音楽が好きなんだけど、オーケストラのために何か新曲をといわれる。大学の近くにあるラーメン屋の一室で、お酒を飲みながら話しました。お渡しできるような曲は別にないんだけど、一年前に書いて演奏されないままになっている作品があるんですよ、と。そうして「ラウダ･コンチェルタータ」のお話をしました。木琴をマリムバにしようということになりましてね。木琴とマリムバでは響きの面で少し異なりますけど、まあ、それほど違うわけでもない。若干の加筆と訂正をいたしました。おかげで、眠っていた曲を世に出すことができたんです。」
「ラウダ・コンチェルタータ」を伊福部から受け取った池田は、これを新星日響創立十周年記念の曲とする。初演は 1979 年 9 月 12 日、指揮は山田一雄、マリムバは安倍圭子、オーケストラは三管編成である。プログラム「SUBSCRIPTION CONCERT No.36」に池田が文章を載せている。

私たちが最も共感できる作曲家、伊福部先生よりプレゼントいただいた「オーケストラとマリンバのためのラウダ・コンチェルタータ」は日本人である我々の心にズシンと響くバイタリティあふれたもので、きっとご満足いただけるものです。
独奏される安倍圭子さんはマリンバという楽器を芸術的に高められた世界的な奏者。今回の作品にも、「日本の太鼓を思わせるマリンバの特性をもった打楽器的要素の強いすばらしい協奏曲」と並々ならぬ意欲でのぞまれます。

　いやー素晴らしいですね！う一今日はどんな風にできるでしょうか？また 1983 年 2 月 10 日「伊福部昭　協奏四題」と題された井上道義指揮、東京交響楽団の演奏会のプログラムにも伊福部先生の楽曲解説がありました。こちらも引用させていただきます。

お世話になった伊福部先生本の数々。横浜市図書館素晴らしい！

ラウダ・コンチェルタータとは、司伴楽風な頌歌と言う程の意ですが、この作品では、マリムバとオーケストラとの協奏の形がとられています。ゆるやかな頌歌風な楽想は主としてオーケストラが受けもち、マリムバは、その本来の姿である打楽器的な、時に野蛮にも近い取り扱いがなされています。この互いに異なる二つの要素を組み合わせること、言わば祈りと蛮性との共存を通して、始原的な人間性の喚起を試みたものです。

ひーたまりません。祈り、野蛮、始原的な人間性の喚起！

さて、伊福部昭先生ってどんな方だったのでしょうか？そもそもチェレプニン賞ってなに？この辺りも「伊福部昭の音楽史」に教えていただきました。賞を創設したアレキサンドル・チェレプニンという方はロシア貴族出身の作曲家でありピアニストだったそうです。奇特な方で、日本人を対象とした作曲コンクールを自ら主催されたんですね。このときの審査員はルーセル、タンスマン、イベールなど当時のパリで活躍する一級の作曲家達だったといいます。北海道庁の森林官を勤めながら独学で曲を書いていた伊福部先生はこのコンクールでいきなりオーケストラ曲「日本狂詩曲」で一等賞受賞です。やがて 1936 年に日本を訪れたチェレプニンと出合った伊福部先生は生涯で唯一となる指導を受けたのだそうです。そのときのエピソードにこんなのがありました。

「コードを決めるとき、ふと三回叩くと、チェレプニンが脇で見ていて、そこは三拍にするのかと尋ねてくる。いや、一拍と答えると、それじゃあテストにならない。音というのは運動と継続の芸術だ。作品では一度しか鳴らないコードを二度三度とテストしては、絶対に音楽にならない、叩くのは一度だけで決めろという。聞こえない音、決めても後で覚えていない音は書いてはならぬというのが彼の主義でした。込み入ったコードを書いても判るものでない、つとめて単純にしろ、絶対にコードを目で書いてはならない、要するに和声学など必要ないということです。」

そしてついにチェレプニンは伊福部先生にこう言います。

「日本の作曲家とはずいぶん会った。しかし、どの男も酒が弱いな。伊福部。ヨーロッパでは、酒を飲まずに歴史を作った人間は一人もいないんだ。日本にはいるかね？」
「いないと思います。」
伊福部がそう答えると、チェレプニンはにっこり笑ったのである。
「そう、酒も飲めないで大きな仕事ができた人間は一人もいない。伊福部、君は酒が飲める。私は気に入ったよ。条件の半分は整っているじゃないか。音楽家になってはどうだ？」

それでも決心はつかず北海道で林務官、林業試験場などを歴任されますが、ついに 1946 年 8 月 16 日に上京されます。なんと 68 年前の今日ですね！！ああなんという記念の日でしょう。

上京後は東京音楽学校（現在の東京藝術大学）の作曲課講師に就任、1953 年には名著「管弦楽法」を出版、さらには日本が誇る特撮怪獣映画「ゴジラ」を含む数々の映画音楽や「シンフォニア・タプカーラ」、本日の「ラウダ・コンチェルタータ」などに代表される数々の絶対音楽の傑作を書かれました。また 1974 年には東京音楽大学作曲家教授、1976 年からは学長を務められます。
と書くとまさに順風満帆な音楽家人生を過ごされたように思えますが、その人生は決して平坦なものではなかったようです。終戦後の日本クラシック界はソナタ形式、調性、無調、前衛、などの欧米への憧れが満ち溢れ、1954 年に書かれた「シンフォニア・タプカーラ」のときには、とある若手作曲家から「今こんな曲を書いていては駄目なんじゃないですか。時代に乗り遅れますよ。」などと言われたそうです。

それでも伊福部先生がお考えになったことってなんだったんでしょう。

「日本の音楽でも芸術でもそうですが、ねらいが「憧れ」なんですね。憧れで集めてきた「根なし草」のようなものを寄せ集めたのが今の日本の近代文化の根底を成しているものだと思う。自発的なものじゃなくて憧れ。高山へ行ってきて「この植物いいな」と採ってきて自宅の庭に植えるのと同じような。枯れるに決まってるんです。」（1994 年新交響楽団第 145 回演奏会プログラムより）

「ええ、ソナタというのは～中略～ウイーンでベートーヴェンなどの確立したソナタがありますね。

～中略～彼は長い旋律を書くことがあまり得手でなかったので、モチーフをちぎってつないでいく、ああいう手法を創案したのだと思います。ひとつの素材で訴えていくにはまことに良くできた形ではありますが、とにかく再現部が出てくるんで、私ははじめ嫌っていたわけです。」（伊福部昭の音楽史）

「私たち東洋人、殊に日本人の伝統的な造形観は、何かこの左右対称のシンメトリーという観念を、計算され過ぎたもの、いわば美から遠いものとして受け取ってきたのです。」（伊福部昭 音楽入門）

「日本、日本とこだわっているわけではなく、自分の感性に正直に作曲したいのです。しかし血液が日本のものでできている以上、自己の感性に正直であれば、どうしても民族的になると思いますよ。～中略～まだお前でないところのお前。これに向かって語りかけること。そこに芸術の行く先があるはずです。ですから、音楽でもってわれわれの中にあるものを全部ぶつけていけば、日本人にも外国人にも訴えかけられる、そういう曲がかけるばずだと思っています。」（伊福部昭の音楽史）

「ラウダ・コンチェルタータ」の時は、これはもう、ちょこちょこやるだけでは駄目だというので、オーケストラのゆるやかな節と、マリムバのリズミックな音を拮抗させて創りました。この曲が初演されたときは、「リトミカ・オスティナータ」から二十年近く経ってましたかねえ。皆さん、口には出さないけど、そろそろ前衛とか現代音楽といわれる傾向のものに飽きていた。そこに私の曲が出てきたので、初演の時はえらく受けたんです。安倍圭子さんも熱演でしたし、指揮の山田一雄さん、演奏

世界的マリンバ奏者にして真実のパイオニア！安倍圭子先生との感動の乾杯です！この方の演奏がなければ本日はありません。

くにたち室内管弦楽団との出会いをきっかけに、完成までに３年かかったマリンバソロ譜。

に携わった新星日響の皆さんも、たいへんな力の入れようでした。今まで筋肉のない音楽ばかり聴かされて、そんなものにつきあっていられないと思う人たちが迎えてくれた。音楽とはこういうものなんじゃないかと。（伊福部昭の音楽史）

ぶれることなく、自身を見つめて進まれた方だったんですね。「ラウダ・コンチェルタータ」は再評価のきっかけになった曲。

そして 2006 年 2 月 8 日、91 歳で伊福部先生は亡くなられました。

ああ、それにしても同時代に生きた方の作品を演奏できるって素晴らしいなと思います。思えば出会いの連続ですね。ひょんなことから FM ラジオ放送で出会った「ラウダ・コンチェルタータ」。ひょんなことからご縁をいただいた一橋大学のオーケストラ。ひょんなことから結成した打楽器アンサンブル「I・G・of Percussion Orchestra」。ひょんなことからマリンバに取り組んだ池野成先生作曲「Evocation」。このひょんな出会いの連続が「やりたいと念ずればやれる」という裏づけのない信念になりました。そう言えば水星交響楽団、齋藤さんとの出会いもそんな頃ですね。そしてひょんなことから「ラウダ」のスコアを入手してマリンバ譜を起こしたのも、安倍圭子先生に見ていただいたのも、本日の舞台に上ることも、すべては同時代の皆さんとのひょんな出会いに違いありません。

池野先生も伊福部先生もいらっしゃらないお盆の夏。
祈りと蛮性との共存。
マーラーが完成した最後の交響曲とともに。
本日ご来場くださいましたみなさまとの出会いがよいものになればそれに過ぎる喜びはありません。

（山本　勲）

交響曲第 9 番ニ長調

Sinfonie Nr. 9

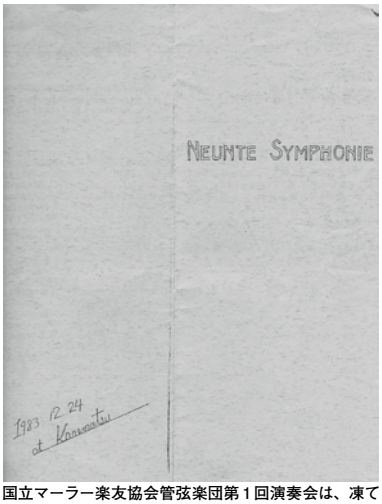
グスタフ・マーラー　Gustav Mahler

マーラーはかつて「いつの日か私の時代が来る」と予言した。
敢えて言おう、「今日こそがその日である！」と！

第一部　水星交響楽団がマーラー交響曲第 9 番を取り上げることの意味

「特別演奏会」と銘打ってはいるものの、本日ご来臨下さったお客さまの大半の方からすれば、今日の演奏会は単に水星交響楽団の演奏会の一つに過ぎないだろう。あるいは水星交響楽団という意識すらなく、よく知らないアマオケだけどマーラー交響曲第 9 番（以下マラ 9）をやるから、あるいはラウダ・コンチェルタータをやるから聴きに来ただけ、という方も少なからずおられるかもしれない。しかし水星交響楽団の母体となっている一橋大学管弦楽団出身者にとって、本日「特別」演奏会の「特別」には、何ものにも代えがたい深い深い「特別」な意味がこもっているのである。迂路になるかもしれないが、まずそのことから書き起こしていきたい。

今を遡ること 31 年となる 1983 年、一橋大学管弦楽団は夏合宿において、マラ 9 終楽章をスコアからの切り貼りで試演した。少し前に FM で放送されたバーンスタイン / ベルリンフィルのマラ 9 一期一会ライヴ（13 年後にようやく正規発売されレコードアカデミー大賞を受賞）を聴いた感動を抑えきれなくなったからである。今でこそ毎年どこかのプロオケがマラ 9 を演奏しているが、当時はまだ日本のプロオケが一回、アマオケが二回演奏しただけであり（外来オケは三回）、一大学オケがマラ 9 を演奏するなど思いもよらなかった時代だった。そんな中、それでも何とかマーラーを演奏したいという若者（特に中心となった、一橋大学管弦楽団史上最高最大のコンサートマスターと言われる - ここでは仮にイヴァンコ・メコスキーと呼んでおく - 青年（現在は中年））達の精一杯の試みだったのである。



国立マーラー楽友協会管弦楽団第 1 回演奏会は、凍てつく一橋大学兼松講堂で、1983 年のクリスマスイブに開催された。

しかしその試演が余りにも感動的な演奏となってしまったことから、運命は思いもかけぬ方向に転がりだす。若者達は不遜にも「あれ？一番いい楽章がこんなにうまく演奏出来たなら、全曲もやれるんじゃね？」と勘違いしてしまったのである。そしてその年の 12 月、通常の定期演奏会が終わってから 2 週間、通常演奏会を上回る熱意でほぼ毎日練習を積み重ねた彼らは、オケ名を『国立マーラー楽友協会管弦楽団』とし、クリスマスにマラ 9 演奏会を実現させてしまったのである。当時はまだ名古屋で小学生だった筆者は、大学入学後、幸いにもこの時の録音を耳にする事が出来たが、技術的な綻びを越え、奏者たちの「怨念」の如き想いの強さがひたひたと伝わってくる凄演であった。

こういったわけで、『国立マーラー楽友協会』の演奏会は（集客面を除いては）大成功を収めた訳だが、こうなってくると若者達はさらに暴走（躍進？）を加速させた。なんとこの年以降、『国立マーラー楽友協会』のマラ 9 演奏会を、毎年の年末（稀に年始）恒例行事として定着させてしまったのである。たかが多摩地区の一大学オケ風情（それも総学生数からい

えば明らかに小規模な大学オケ）が、日本でそれまで 6 回しか演奏されたことがない難曲を毎年演奏してしまう。何と痛快な話ではないか !! 実際のところ一橋オケの団員にとっては、『4 年かけて一人前のマラ 9 弾きになる』ということが、正規の演奏会の成功以上の至上命題、神聖なる使命となったのである。

それから 31 年、国立マーラー楽友協会も紆余曲折があった。何よりもまず、1992 年に現役オケが第 40 回定期演奏会においてマラ 9 を取り上げてしまう「暴挙」に及んだのである。筆者はその時現役オケコンサートマスターを務め、しかもマラ 9 選曲の「主犯」であったので、国立マーラー楽友協会に対しては今でも申し訳なく思っているが、その選曲のため、国立マーラー楽友協会は大きな転機を迎えることとなる。それまで毎冬挙行されていたものが、1992 年と 1993 年は休止となるなど、ディアスポラな状態が数年続いたのである。

この危機的状況に立ち上がったのが、国立マーラー楽友協会の OB、OG 達であった。OB、OG を主体として協会を再編、現役学生にもお手伝いいただく形で 1996 年 12 月、復活演奏会が挙行された。国立マーラー楽友協会創始者であるイヴァンコ・メコスキー氏が約 10 年ぶりにコンサートマスターとして復帰されるなど、華やかな話題を振りまきつつ、国立マーラー楽友協会のマラ 9 は劇的な復活を遂げたのである。その後、1999 年、2002 年、2003 年にと OB、OG 主催企画として断続的に 4 回の演奏会が行われ、晴れて 20 周年を迎える事が出来たのであった。

一橋大学管弦楽団
第 40 回定期演奏会プログラム

2005 年秋、現役指揮者の中でも最高のマーラー指揮者の一人である、クリストフ・エッシェンバッハが名門フィラデルフィア管と共に来日し、渾身のマラ 9 を奏でた。筆者も千里を遠しとせず名古屋から駆けつけ、この戦慄すべき名演に立ち会ったものだが、この演奏会に多くの一橋大オケ現役学生も臨席していた。彼ら（特に現役委員長であったギガント・アベ（仮名））は、エッシェンバッハが奏でる、現在到達しえる最高のマラ 9 に触れ、魂の激動を覚え、そしてその勢いで、国立マーラー楽友協会が当初そうであったように、再び現役企画としてマラ 9 演奏会を実現してみたいという大志を抱いた。OB たちは現役学生達の熱い想いを歓迎し、快く『大政奉還』を行った。そして 2006 年 5 月、国立マーラー楽友協会は現役学生企画として、三度目の出発を飾ったのである。以来、毎年現役学生に OB、OG が適宜加わる形となり、正に当初の理念の如く、学生さんが 4 年をかけてマラ 9 の神髄に迫っていくあり方がすっかり定着し、12 月あるいは 1 月の国立の風物詩となったのである。

さらに 2012 年、『大政奉還』を行ったおやじ達が「学生さんに迷惑をかけない範囲で、もういっぺん自分達もマラ 9 を味わい尽くしたいんじゃあっ !」という清らかな願いを制御しきれなくなり（人間、きれい事だけでは済まないのだ）、寒さで体が動かなくなる弊を避けるべく 5 月に OB、OG を中心とした「おやじマラ 9」企画を開始。こうしておやじ企画と若人企画とが出揃い、マラ 9 メニューもヴァラエティーに富むようになることで、いよいよ国立マーラー楽友協会のあり方が広がりと深まりをもってきたといえるだろう。ちなみにマラ 9 初演 100 周年にあたるこの 2012 年には、1 月若人マラ 9、5 月おやじマラ 9、12 月若人マラ 9 と、国立マーラー楽友協会は実に三度もマラ 9 を演奏し、この偉大な楽曲を顕彰したのであった。

さてこうした経緯を踏まえると、国立マーラー楽友協会設立の翌年に一橋大学管弦楽団の OB オケ（つまりほとんどの団員が、国立マーラー楽友協会会員でもある）としてスタートした水星交響楽団（以下水響）の最得意演目がマーラーの交響曲であるのは当然過ぎるほど当然のことであったろう。今年で 30 周年を迎える水星交響楽団はこれまで交響曲第 8 番、第 9 番、第 10 番の 3 曲を除く全てのマーラーの交響曲を演奏しているのである（しかも 2 番は 3 回、3 番、5 番、6 番は 2 回）。しかし水響はこれまであえてマラ 9 を演奏してこなかった。マラ 9 をやる時は水響が解団する時なのだ、あるいは第 100 回定期の演目としてとっておいてあるからだ、事実上別働隊である国立マーラー楽友協会があるのだから水響は永遠にマラ 9 を演奏しないのだ、エトセトラエトセトラ・・・ネット上で駆け巡る数々のドラえもん最終回ストーリーの如く、実に色々な理由が取り沙汰されていたが、間違いなくいえるのは、水響のメンバーにとってマラ 9 は最も「特別」にして最も神

聖な曲であり、もし演奏するとしても、そうおいそれと手をつけるべきではないという暗黙の共通認識は完璧に出来上がっている、ということである。

その水響が今回、満を持してマラ９に取り組むのである。冒頭で述べた、「我々にとってマラ９演奏会が特別」というのは、実にそういった意味なのである。本日演奏するマラ９は、31 年に及ぶ、今回残念ながら出演できなかった人々をも含む､国立マーラー楽友協会でマラ９を演奏したことのある全ての人たち一人ひとりの、深い深い想いの総結集としてのマラ９なのである。

さらに言えば、本日の指揮者・齊藤栄一氏（以下レニー齊藤）は、これまで英国留学に伴うそれぞれ一度だけのお休みを除き、国立マーラー楽友協会、水星交響楽団の全ての演奏会で指揮をしてきている。レニー齊藤は今や単に両オーケストラと一心同体というだけでなく、「両オケこそ齊藤栄一そのものである」とすら言える関係である。筆者はレニー齊藤の下でマラ９を 24 年間弾き続けているが、年々表現の陰翳が深くなり、表情が濃厚になっていき、正に抜きも差しもならない唯一無二のマラ９像が描出されていくことに恐怖に近い畏敬の念を抱いている。若い頃は生意気盛りだったこともあるが、「ここはシェルヘン盤の方が速くてよいのになぁ」だとか「ここはレヴァイン盤のようにたっぷりやりたい」などと感じるところがなくもなかったが、年を経れば経るほどに、国立マーラー楽友協会でマラ９を演奏するたび「マラ９の唯一無二、最高の解釈が紡ぎだされていく現場に今、奏者として立ち会っているのだ」というゾクゾクする喜びを感じている自分に気付くのである。奇しくも今年はレニー齊藤が還暦を迎えられた記念イヤーでもある。筆者は、幾重にも記念と喜びに彩られた本日のマラ９演奏が、これまでの 31 年間の総決算であるとともに、レニー齊藤、水響、国立マーラー楽友協会の新しいスタートにもなる名演奏になるものと確信してやまないのである。

水響ゆるキャラ候補（?） マキュー

第二部　それではそもそもマラ９とは何なのか

「かつては輝かしい熱情で詩を作った私がおゝ、泣き濡れて悲しい曲を始めねばならぬ。」（ボエティウス）

マラ９を一言で要約するならば、この世を誰よりも愛し、しかし信じたいと願い続けた死後の永世というものを結局信じる事が出来なくなってしまった男が、確実に遠からずこの世と別れを告げなければならないと悟った時に、最後に残された僅かな時間に行った最もつきつめた思索と、誰よりも愛した現世への切々たる未練の念の吐露、といえるであろう。

筆者が愛するマラ９に関するエピソードに、指揮者のベンジャミン・ザンダーが語ったものがある。イギリスのあるオーケストラに所属するヴィオラ弾きの女性は、自分のオケで次に演奏する曲のレコードを必ず家でかける習慣であった。そして彼女の家に、まだ 3 歳の小さな姪が頻繁に遊びに来ては、かかっている曲がどんな内容であるかを知りたがり、その女性はいつも即興で曲調に合うようなおとぎ話を姪に語って聞かせていた。ある時､次の演目がマラ９だったので、そのレコードをかけていたところ、来ていた姪がどんな曲か聞いてきたので、彼女はいつものように魔法使いや王女様がでてくるお話をしてあげた。ところが 3 歳の姪はお話を聞き終わった後､いつもとは異なり、彼女をじっと見つめて「でも、本当はこの曲はどんな曲なの?」と再度尋ねたのである｡3 歳の子どもですら、この曲が持つ深く烈しい精神性を感じ取ったことに気付いた彼女は、今度はつまらぬおとぎ話ではなく、マーラーが生涯を通じて死を恐れ､特にマラ９が「生とは何か、死とは何か」を最も深く考え抜いた音楽であることなどを語って聞かせたのであった。大意はこんな内容だったと記憶している。これが実話かどうかは分からないが、マラ９がどんな音楽であるかを多少なりとも知っている人からすれば、これが実話だとしても全く違和感がない。マラ９とは、ことほどさように真摯に耳を傾けるものにとっては、千万言を要するよりも「聴けば分かる」音楽なのである。

第８番を作曲するまでのマーラーの人生観・宇宙観のベースラインは、死後の永世（アルカディア）における勝利・救済、というものであった。皮肉な言い方をすれば、彼の作曲の歩みは、第８番に向け、そのイデーが徐々に崩壊していく過程ともいえるの

だが、そうはいってもその信念は一応、彼の作品群を貫く基本理念であり続けた。しかし、ヴィーン帝国歌劇場総監督の屈辱的解任、娘の一人の夭折、妻との不和、更に心臓病の悪化により死期が近いという医師からの宣告、それら次々に降りかかる苦難に直面し、事もあろうに自らの余命いくばくもないとわかると同時に、ずっと大切に抱き続けていたマーラーの死後の永世への理念は烈しく揺らぎ出したのである。正に「我、生前の生を知らず、いずくんぞ死後の生を知らんや」である。

しかも同時に彼は、自分が間もなく、この上なく愛した現世から去っていかなければならない事も痛いほどわかっているのだ。50 年近く、あると信じ（或いは信じようと努め）ていた永世への確信が粉微塵に崩れた後に、もうすぐ死ぬということが具体的に意識され始める。これほど悲劇的な状況があるだろうか。死は、彼にとって救いでも慰めでもない。永遠の闇黒があるだけなのだ。故に死は彼にとって最大の恐怖となった。彼に信じられるものは、既に自分には享受する時が幾らもない現世だけであった。彼は現世のみを信じ愛し肯定し、その上で死を、現世を、目を背けず凝視した。そして胸に溢れる想いの丈を綴った、第 9 交響曲に於て。かるが故にこの曲は、他に類を見ぬ真実味を帯び、我々の胸に迫ってくるのだ。

ベルクが絶賛し、事実素晴らしい完成度の**第 1 楽章**は、死への恐怖に悶え、現世への憧れに病み傷ついた胸を焦がすマーラーのありのままの姿が現れている。曲が盛り上るにつれ、彼は高揚し幼時に親しんだハプスブルク軍兵舎からのトランペットの音を回想するが、その調べが最高潮に達した途端、音楽は打楽器群の一撃ですさまじい破滅を迎え、陰鬱な葬列が登場、彼は再び死への脅威に戦き逃げ悶えるのだ。音楽でかくも赤裸々な自分をさらけ出した人がはたしていただろうか？

第 2 楽章では粗野なレントラーから始まるが、それをテンポⅠとし、狂ったスピードのテンポⅡ、緩やかなテンポⅢと総計 3 つのテンポの三拍子が入り乱れて展開する。音楽は次第に高潮し、狂気を孕んだ、いや狂気そのもののワルツを繰り広げる。

第 3 楽章は彼には相応しいロンドーブルレスケ（ブルレスケは野卑な道化芝居）である。彼の生き方を如実に現した〝非常に反抗的に〟の指示のもと、曲は聴く者も弾く者も破滅に誘うような焦燥感をもって突き進む。途中救いを暗示する如くコラールが現れ、不滅の第四楽章の予告として切々とした嘆きの歌を奏でるが、すぐに気味悪い雰囲気に飲み込まれ、再びもとのテンポに戻ると曲はそのまま速度を速め、救われぬ彼の精神をうちのめし、威圧的に殆ど暴力的に終わる。

聴衆が呆然とする間もなく、思いもかけぬ肺腑を衝く弦の深い響きが鳴り渡る。**終楽章アダーヂョ**が始まったのである。彼は自らの全生涯をふまえ、彼の人生のコーダとして現世の美しさを謳いぬく。前作「大地の歌」を思わせずにはおかない中間部が突如断ち切られる様に終わると、マーラーの感情は一気に噴出する。彼はまだ死ねないし死にたくないのだ。言いたいこととて無限にある。しかし残された僅かな時間の中で一体どれを言ったらいいのか。彼は胸をかきむしりつつ多重的にそれらを吐露する。然るに突如として力強く現れるトランペットの音は最早その時すら終わった事を告げる。その直後の引き裂かれる様な悲痛なヴァイオリンの響き！マーラーはここで遂に現世に別れを告げる。次第に音楽が弱まっていき、曲は総譜の最終頁のアダーヂシモに到る。そこでは彼は既にこの世の人ではないのかも知れぬ。されど彼の精神は常に現世を志向している。そしてここに於て彼は、50 年近くかけて考え到達した全てを凝縮して言おうとしているのだ。私にとってこの世とは、人生とは何だったのか。決して声高にはならぬ。然れども声高にそれを述べた時とは較べものにならぬ程切々と彼は訴える。其処には寸毫のゆとりもなく、その時迸る涙を彼は決してとめることさえ出来なかったろう。そう、私にとって現世とはかくも美しく素晴らしいものであった。かけがえもなく尊いものであった。が自分は死んでいく。死にたくはない。しかし死んでいくのだ…。絶望的憧憬の中、最後の最後まで未練を残し、躊躇いの裡に曲は凄まじい緊張感を伴った、奏者にも聴者にも万感の想いを喚起せずにはおらぬ永遠の沈黙の中にいつ果てるともなく消えていく―。この沈黙こそは、マーラーが生涯の最後にようやく獲得し得た、最も偉大な創造物なのである。

水響ゆるキャラ候補（？）
すいっきょ（二足歩行タイプ）

(国立マーラー 31 周年、水響 30 周年の今日、マラ 9 を演奏出来ることの喜びに打ち震えるピロシこと高橋広)

水星交響楽団

◇指揮者
齊藤　栄一

◇コンサートミストレス
二島　詩帆

◇ファーストヴァイオリン
安谷屋　靖
梅津　譜
奥野　大志
川原　ひかり
國宗　洋子
坂本　明日恵
髙橋　広
高原　苑
豊田　由起
永井　翠
西沢　洋
二島　詩帆
宮川　妙子
宮川　雅裕

◇セカンドヴァイオリン
石川　貴隆
伊東　陽子
大西　彩加
岡　千里
櫻田　雅信
鈴木　尚志
土屋　和隆
長谷川　知博
前田　啓
松田　侑子
米嶋　龍昌

◇ヴィオラ
網中　愉香
岩崎　宏介
太田　文二
小澤　未来
川俣　英男
蔵満　里奈子
新保　博康
古屋　圭織
藤田　啓也
水上　久美

◇チェロ
岡田　莉菜
小牧　愛
首藤　ひかり
鈴木　皇太郎
髙橋　幾多郎
橘　温子
中山　佐知子
日吉　実緒
松重　英子

◇コントラバス
阿部　洋介
石附　鈴之介
大西　功
刈田　淳司
彦坂　聡美
深澤　雄己
横山　雄一

◇フルート
芥川　詩門
浅野　慎平
大山　司
本田　洋二
和田　由香利

◇オーボエ
石井　英久
齋藤　暁彦
野口　秀樹
長谷川　実里

◇クラリネット
中山　哲兵
長谷川　明子
馬場園　真吾
藤原　誠明
横地　篤志

◇ファゴット
小田中　優介
喜多村　彩子
冨井　一夫
安田　圭介

◇ホルン
倉矢　忠和
島　啓
長坂　英里奈
堀江　碧
山城　晴香

◇トランペット
淺田　健二
石本　槙
金子　恭江

◇トロンボーン
坂田　圭
佐藤　幸宏
福澤　親

◇テューバ
植松　隆治
東海林　拓人

◇パーカッション
小寺　敦子
鈴木　海里
高橋　淳
椿　康太郎
松山　若菜
山本　勲

◇ハープ
東森　真紀子

演奏会のご案内

第51回定期演奏会

2015年2月22日（日）
すみだトリフォニーホール
13：00開場　13：30開演（予定）

オール・バルトークプログラム
管弦楽のための協奏曲／バイオリン協奏曲第2番／舞踏組曲
指揮　齊藤　栄一
バイオリン独奏　西江　辰郎

水星交響楽団ホームページ　http://suikyo.jp
お問い合わせ　email:info@suikyo.jp